

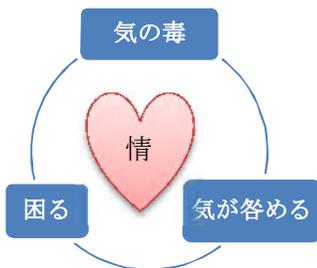
裏切りの構図・気の毒の輪

Junko Higasa

夏目漱石作『虞美人草』第十八章から以下の二文を引用する。

『持って生れた心の作用を、不都合な所だけ黒く塗って、消し切りに消すのは、古来から幾千万人が等しく失敗した陋作である』

『気の毒とはただ先方へ対してという言葉である。気が咎めるとは、その上にこちらから済まぬ事をした場合に用いる。困るとなると、もう一層上手に出て、利害が直接にわが身の上に跳ね返って来る時に使う』



これを循環図にすると、左のような輪ができる。人に気の毒なことをすると最終的に自分が気の毒になる。これが「本来」を無理に塗りつぶして「正当」に結び付けようとするところに起る因果応報である。これは人生一般に言えることであるが、『虞美人草』でそれを「女一人を巡る男二人の三角関係」における一方の男の「裏切り行為の正当化」に当てはめた漱石は、以後の小説でこの流れを展開する。

まず『虞美人草』の小野さんであるが、宗近君という親が暗に認めた許嫁がいる藤尾の心を、宗近君が旅に出ている間に、その機会を利用して奪った。何も知らない宗近君の小野さんに対する友情は昔のままである。小野さんが藤尾と結婚できたとしても、宗近君は藤尾の親類であるから、小野さんの「気が咎める」は一生ついて回る。

次に『それから』の代助であるが、三千代に対する自分の本来の恋情を抑えて、親友の平岡に彼女を譲った。ご丁寧に二人の結婚に際して多大な協力をしている。しかし後になってその恋情を抑えきれず、平岡から三千代を奪う結果となる。その時点でも代助に対する平岡の友情に変わりはない。しかし後の平岡の手紙によって代助は家から勘当され生活に困る結果となる。その後の二人の結婚は『門』の宗助と御米に引き継がれ、安井から御米を奪った宗助の未来の苦悩へと続く。安井は宗助を責めずに消えてしまったが、偶然懇意になった坂井を通じて安井の消息を知り、宗助はいつ安井という「過去の後ろめたさ」が目の前に現れるかという不安に付きまといられる。

さらにそれは『ころ』で決定的となった。K から下宿のお嬢さんへの恋心を告白された「先生」は、抜け駆けして K の留守中にお嬢さんの母親から結婚の承諾を得てしまった。その後 K は自殺した。遺書には先生に不都合な理由は何も見当たらなかったが、先生は自分の行いが原因ではないかという不安に一生付きまといられる。そこへ無邪気に自分を慕う「私」が現れ、ついに過去を手紙で告白して命を絶つ。ここでも K の友情は死ぬまで変わりなかった。

これらが『虞美人草』第十八章に記された「気の毒の輪」の上に「気が咎める輪」が重なり、一番外に『黒墨を流したように未来に連なっている』困る輪の構図である。人に対する裏切りが自分の未来を黒く塗りつぶす因果応報である。

これらは、気弱な男が本来の恋愛感情を抑えたために起った友情裏切り物語である。提示されるのは「優位に酔い感わされた男の軟弱化」という問題である。(2014.3.15)